



3章

将来の水文化を意識するための 7つの潮流

文化をつくるために潮流を意識しよう

オープンデータだけで、現在の水文化を表すテーマを並べてみた。現代生活・社会のほとんどすべてに水文化が関わっていることが実感できたのではないだろうか。調べたのは現役のライターズチーム。専門家ではないが世の動きに敏感なチームが何を調べ、どんな疑問をもったのか、テーマ毎に散りばめられている。そこに未来を読む芽が隠れている。

ライターズチームは水文化を整理するために「遠い、近い」「見える、見えない」という「ものさし」を用いている。「遠い水、近い水」論を唱えたのは、環境社会学者の嘉田由紀子氏だ。そのことをメンバーは知らない。しかし、現代水文化を捉えようという時、「遠近と可視」は有効なものさしと映ったのだろう。

まったくその通りで、人口増大局面であった過去半世紀の水文化の特徴や課題をあぶり出すには、このものさしが有効だった。川で遊んだ、井戸水を飲んだ、銭湯に行った、林や小川があった、船が行き交っていた……、そんな水に近い心象風景がだんだん遠くなり、いまでは見えなくなった。そんな経験を、いまでは60歳代後半を中心とした団塊の世代以上の方々はもっている。自らが子どもの頃から過ごした社会の変化こそが経済成長の潮流であって、水が見えなくなっていった過程であった。

「水は遠くなり、見えない所にある」。この共通認識が生まれると同時に、「日本は水の国」という美しいブランドも成立していった。「最後の清流」「湧水のまち」「名水百選」「棚田のむら」等々、全国に水ブランドが成立し、当たり前だった習慣が「美しい、守るべき文化である」と意識化されていった。

文化を自分の言葉で説明するには、情報を整理するための「ものさし」と、世の中がどの方向に変化しつつあるかという「潮流」の認識が必要だ。

全国にある水ブランドを見て、「この水文化を守り抜いていきたい」と言うのと、「この水文化を活かして、新たな環境で生き残っていきたい」と言うのではその意味が異なる。これまでの時代潮流で見れば現在の水文化は過去の結果。時代潮流が未来に向けて変わりつつあると意識すれば、いまの水文化は将来への資源である。「遠い水、近い水、見える・見えない水」というものさしに加え、いま時代の潮流がどのように変化しつつあるのか意識しないと、苦勞して集めたオープンデータも眺めて終わってしまう。

そこで地域政策を専門にしている者として、いま未来に向けて変わりつつある7つの時代潮流について、簡単に説明したい。

潮流① 少子高齢化はチャンスだ

大学生に「森の中の自然とコンクリートとアスファルトの都会。君たちは、どちらに住みたい?」と尋ねると、圧倒的に都会を選ぶ学生が多い。そして「コンビニが無いとイヤです。ミネラルウォーター飲むのは当たり前です」と続く。こんな世代がこれから多数を占めていく。

少子高齢化とは、世代交代が急速に進むということだ。チャンスも増える。

「人口減少はほんとうに悪いことなのか」「過渡期をいかに乗り越えるか」というライターズチームの問いは、理由のあることなのだ。人口増加に合わせて国土・都市・住宅・流通基盤を整えてきた結果がいまの日本の日常風景をつくっている。しかし、人口が減少すれば空き家も出るし商店街も廃れる。とはいえ魅力ある場は変化しながらも続いており、客の数に合わせて淘汰されているだけとも言える。

みんなが「困った、問題だ」という転換点に、社会のイノベーションは起こりやすい。

少子高齢化はチャンスなのだ。

潮流② 農の水利用が、地産地消圏形成へ

少子高齢化がチャンスであることを示しているのが、水利用の変化がいろいろな場で起きていることである。

「日本は水が豊かな国ではない」とライターズチームは記した。しかし、水量が足りているのか足りないのかは、利用用途によって異なる。例えば農業用水が水利用の7割を占めているのは実はここ40年間変わっていない。平六濁水といわれた1994年の水不足では、農業用水から生活用水へ水を融通するのに難しい調整が必要だった。ところが、ちょっと考えればわかるように、農業就業者はどんどん減り、耕作放棄地も増えた。最近では農業用水の逼迫という言葉も聞かなくなった。おそらく実際には農業用水の余剰は増えているのだろう。

少子高齢化は世代交代の時代。ということは、土地の相続や事業承継を迎える農家がこれからも増える。意欲ある農家や行政は、若者や社会人を農業現場に迎え入れようとしている。産直ビジネスも元気だし、もちろん農業生産法人も参入し始めている。新たな人材が参入し、旧来の規制を面倒と思ひ始めれば、これまでの農業用水の利用も変わってくるだろう。

農業用水、工業用水、生活用水といったこれまでの大雑把な括り以上に、多様な用途の把握が必要だ。なぜなら水は消

費資源ではなく循環する資源だからである。川上から川下まで森林を守ったり、生態系を守ったり、発電資源、農業用水、工業用水、生活用水、漁場維持、環境資源……と多様な役割を果たすのが水である。この多様性を循環系全体として最大限に維持しつつ、利用者が一定の生活水準を享受できるしくみと統合的な管理が必要となる。

潮流③ まちはコンパクトになり、ICTが新サービスを生む

少子高齢化は、都市圏の縮小と都市圏への人口移動を生む。コンパクトシティ化だ。人は職を求めて移動する。これが地域経済のルールだからだ。

その結果、少子高齢化は思いもよらない早さで新サービスを生む。例えば、いま無料宅配サービスを行っている小売店は多いし、ネット通販も普及している。おかげでペットボトルも宅配で頼む人が増え大助かり。防災備蓄用にも買いおく人が増えてきた。

宅配は水だけではない。米のような重いものはもちろん、惣菜、肉・青果まで及んでいる。その中にどれほどの仮想水が移動しているのか興味があるが、どんどん商品が顧客の家まで動いている。同時に、流通経路の効率化が進み、生産者や卸から直接配送される場合もある。

もちろん、全国の中小的のやる気のある生産農家、加工業者、卸、小売業者、多くがこのしくみで利益を出せるようになっていく。

また、多くのデベロッパーが住環境価値が下がらないように魅力あるまちづくりを進めている。魅力の元は食・職・エネルギーだ。多様な魅力をもつ多様なまちが、新サービスを生んでいる。

こうした動きを支えているのがICT (Information and Communication Technology)だ。ケータイ、スマホ、SNS、ネットといった言葉があふれている。生活者は宅配の発注にネット販売を気軽に使っている。これからは机上のPCは触れないという人も、スマホやタブレットは触れるという人が増えるだろう。

ICTの進化で、水との関わりは多様になり、人々とのシェア意識も進むだろう。

潮流④ エネルギーと水の関係が変わる

さて、こうなると電力消費の形態も変わってくる。東日本大震災の起きた2011年。都心では計画停電が行われたが翌年以降は行われずに真夏も真冬も乗り切った。天然ガスを大量に買い付けてしのいだからだ。この間に起きたシェールガス革命は、現在も進行中だ。シェールオイルが掘削され、2014年にはサウジアラビアに次ぎアメリカが世界第二位の産油国になる見通しだ。温暖化を抑止しCO₂削減のための原発過剰利用というシナリオは白紙に戻された。むしろ長期的に自然エネルギーのウェイトを高めながら、温暖化を防ぐ新たなスキームが、化石燃料が増産される中で検討されている。

消費側を見ると、節電型家電は増えているし、工場の電力消費も大幅に効率化されている。いま電力を食い排熱しているのがサーバーだ。暮らしを支え変えていくのはICTだが、それを支えるサーバーが電力を消費していく。安価な冷媒として使え、発電資源でもある水は、その用途が変わってくる可能性がある。現に途上国の中には、水力発電所を増やしている国もある。

エネルギーの制約がある中で、どのような水利用がなされていくのか、大きな問題だ。

潮流⑤ グローバル化する水文化

いま海外の人にとって、日本の水文化がクールだ。きれいな水を利用できるインフラや文化に魅力を感じているのだ。温泉、雪山、海・川、森林、飲める水道、こういったものに魅力を感じ、多くの観光客が海外から訪れている。

観光客だけではない。海外政府・企業は日本のインフラ技術に高い評価を与え、アジア・アフリカ諸国が日本の水道や水処理技術を導入している。

安全・安心を導くシステムとしての水文化。われわれが当たり前とってきたことが、遠い国にあってはたいへんな価値あるソフトパッケージとして捉えられている。遠い水だからこそ、近くではわからなかった魅力が発見されるのだ。

これまでも河川技術、灌漑技術、衛生技術等、日本の水文化が海外支援の形で輸出されてきた。今後は水道、給排水といったまちづくりに至るまで「水ビジネス」という形で有力な輸出産業となっていくだろう。

潮流⑥ 回復しやすい治水へ

見えない水の究極が水害だ。日頃はちよろちよろしか流れていない川が、いざ記録的豪雨となると水害となる。水害というと水の暴力的な力ばかりが目につくが、浸水地が原野なら実は被害は無い。重要な土地が浸るから損害が大きくなり水害となる。そこで、上流に遊水池をいくつもつくり、下流の都市部を守るのが合理的ということになる。治水は土地政策や都市政策でもあるので、統合的水管理を行う必要がある。

一方、同じ水害でも、ゲリラ豪雨で見られるような都市水害になると様相が異なる。雨水が急速に下水を伝い都市河川に集中し溢れるのが問題なので、都市部の緑被率を上げ、ゆっくりしみこみ流れ出すようにするしか方法が無い。

遊水池なり土の土地を増やすなり、どちらも雨水と地下水の道をつくってやることである。実は地下水がまったく見えない水のみちとなっている。

地下水への道を見えるようにし、「溢れても損害は少なく、回復性が高い治水」という考え方にこれからの治水思想は変わっていくだろう。

潮流⑦ 移動がキーワードとなる

全国の歴史ある観光地に行くと町家風景が見られる所が多い。町家や古民家は海外観光客からも人気の高い風景である。まちづくりの核として、こうした町家・古民家を守る所も多数ある。だが、詳しく見ると、そこはただ「守られている」だけではなく、オフィスや住宅として「利用されている」。人が使っているから、人も集まる。そこには地域外からやってきた人が住んでいることもあるし、カッコイイ事務所として内装は快適にし、外見を保っている町家もある。移動者・新規参入者が魅力を生み出しているのだ。

同じように、水文化というと、どちらかというと守り手がいって、土地の所有権、水利権、持ち家意識など、そこで定住することを補強する文化だったと私は感じている。だが、これからの水文化に欠かすことのできないのは「移動者」が更新する水文化ではないだろうか。こうした移動者は、これまで当たり前と感じていた水文化を魅力的と感じたり、気づいたりする。

キーワードは「Re」だ。リノベーション、リサイクル、リユース……スクラップ・アンド・ビルドで新たなものを造るのではなく、再利用する。そこに価値を見いだしていこうというのが、

少子高齢化とICT化での価値創造スタイルだ。

河川敷にあるすてきなカフェ、ベッドタウンに残った水路で小水力発電、丘に立つニュータウンの都市公園で菜園を開き、近くには地元野菜レストランと直売所。不便な場所にある空き家は行政で買い上げて壊し、自然緑地に。スマートシティでは野菜工場と自然エネルギー発電所とサーバーステーション、その中に小川が流れている。川の横では定期市が催され大賑わい。

「移動者」である新たな水利用者がどんどん参入すると、これまでの水文化の眺めが変わってくるだろう。

クリエイティブ水都へ

地域政策の分野では「創造都市」や「クリエイティブ・シティ」という言葉がある。脱大量生産社会の中で、そこに住む人々、働く人々が創造的に活動できる都市。こんな意味合いで多くの論者が使っている。この考え方の背景には、人々の創造力というもの個人能力だけではなく、社会のしくみによるという思いがある。

人口増大局面後の水文化。これまで培われてきた水文化を、再編・編集し、新たな価値を生む。このエンジンとなるのは、水の守り手ではなく、水の利用者だろう。水の利用者が集積して住むのが都市。都市環境・都市に行き交う人々が創造的な水利用をできれば、水文化は変わっていく。

これまで挙げた7つの潮流は、一言で言えば「世代交代の奔流」だ。この潮流を意識して、オープンデータを見直し、テーマ毎に未来を創造・企画すれば、新たな水文化が生まれるに違いない。

多様なクリエイティブ水都の誕生である。

楽観的な私は、そんなことを考えている。

多摩大学経営情報学部准教授(地域政策)

中庭光彦